

祝・認定！筑波山地域ジオパーク

ジオパーク (Geo Park) の「ジオ (Geo)」は、「大地」や「地球」という意味。9月に筑波山地域が、日本ジオパークに認定されました。



いしおかの 大地を歩く

第6回

マグマから生まれた白い岩

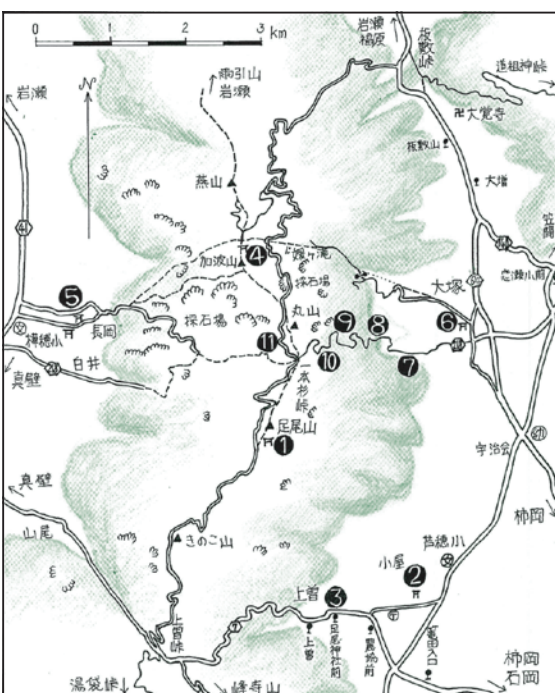
2億年をさかのぼる石岡市の大地の物語を訪ねる歩き書きのシリーズ。全8回の掲載です。

筑波山から北には山並みが続いている。その所々に採石の白い岩肌が見える。雨引観音の辺りは変成岩からなるが、そこまでの山々は全て白い岩の花こう岩からできている。この岩石は6000万年前にマグマが地下でゆっくり固まった結晶質の岩石で、石材として利用されてきた。「真壁石」で知られるものは、山の西の桜川市側の細粒の花こう岩で、灯籠などの細かな細工物に向いている。広く分布する中粒の花こう岩は、主に建築材などに利用されていた。しかし、近年は輸入石材の増加や、コンクリートブロックの普及で石材の需要が減ったため、休んでいる石切場が多くなった。

八郷盆地から見える、筑波山の北の美しい姿の二峰は、南が足尾山、北が加波山である。足尾山①は、1300年前の常陸国風土記新治郡条に記載されている「アシホ山」にゆかりのある名だといわれている。山頂には足尾神社があり、麓の小屋に里宮②があり、麓には鳥居③がある。加波山④にも山頂に加波山神社と加波山三枝神社があり、石岡側の大塚には加波山神社の里宮⑥が、西麓の桜川市長岡にはそれぞれの里宮⑤がある。この二山は信仰の山である。山麓の各所から参拝の山道が開かれ、一丁(約100m)毎に距離を示す石柱も建てられていた。今は歩く人も少なく、石柱も埋もれ、やぶに戻った道も多い。加波山は山中で修験道の修行を行う加波山霊場として知られ、今も夏には禪定祭が行われている。

現在の上曾峠、大塚、板敷峠から自動車で山頂近くまで上ることが出来る。大塚から一本杉峠までの道は砂利道だが山の様子がよくわかる。なかなか斜面に沿って集落が続く、谷越しの北側にも大きな斜面が見える⑦。斜面の表面は赤土(ローム層)に覆われているが、切り通しの断面では、花こう岩の大小の岩塊が砂礫中に散っている⑧。これらは山の上から崩れてきた土石流の堆積物である。山腹にさしかかると曲がりくねった急坂となり、岩盤が現れる

⑨。しかし、多くが指で崩せるほど脆く、風化が進んでいる。尾根に近づくと沢沿いには崩れた大きな岩塊が重なっている⑩。尾根には風化に耐えた岩盤が丸い形で見えている⑪。山頂付近は硬い岩盤で、険しい地形になっている。加波山神社拜殿下までは車で入ることが出来る。尾根沿いに山頂を目指す時幣束が供えられた奇岩が次々と現れる⑫。いずれも細粒の花こう岩の岩盤に生じた割れ目(節理)が崩れて生じたものだ。細粒の花こう岩は風化に強いため、このような奇岩が生まれ



▲加波山・足尾山付近案内図

た。加波山頂が足尾山より険しいのはまさに岩質の差の現れである。加波山霊場は巨岩や岩陰に神仏を祀り、それを巡ることで自らを浄める場である。山頂の巨岩を見て回るだけでもその雰囲気を感じ取れる。足尾山頂近くの「東道三十六丁」の石柱や、加波山神社前の三十四丁石に刻まれた「右大つかふちう(府中)」の文字には、古来からの山麓との絆が感じられる。

文：環境省委嘱自然公園指導員 矢野徳也